# 2021年１月３日（日）「神のヘセド（慈しみ）に立脚して」

詩編13編

1 指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。

2 いつまでですか、主よ。
私をとこしえにお忘れになるのですか。
いつまで御顔を隠されるのですか。
3 いつまで私は魂に思い煩いを、心に悲しみを日々抱き続けるのですか。
いつまで敵は私に対して高ぶるのですか。

4 わが神、主よ、私を顧み、答えてください。
私の目を光り輝かせてください。
死の眠りに就くことのないように。
5 私が揺らぐのを見て、敵が、勝ったと言わず、私を苦しめる者が喜ぶことのないように。

6 私はあなたの慈しみに頼り、私の心はあなたの救いに喜び躍ります。
「主に歌おう。主が私に報いてくださった」と。

【序論】

新年あけましておめでとうございます。去る2020年は世界規模に拡大する新型コロナウイルスとの戦いの始まりの年でありました。私も人生半ばに経験したこの出来事を一生忘れることはないでしょう。「あんなこともあったなぁ」と振り返れる日が来るのか、それとも人類とコロナの戦いはまだまだ続いていくのか。まさに「いつまでですか」と叫ばざるをえない状況に立たされております。

毎年、年始の説教は詩篇から語らせていただいていますが、今年は13篇からご一緒に御言葉を聞いてまいりましょう。本篇は「いつまで詩篇」とも呼ばれるように、詩人が直面している困難な状況の出口が見えない中で歌われたものです。人間の一生には、多かれ少なかれそのような経験が伴います。いつ終わるとも分からぬ戦争や独裁政治の下で苦しむ人々、なかなか治らない病、いつまでも癒されない心の傷。それぞれの状況に照らしながら、詩人と心を一つにしていただければ幸いです。

【本論】

本論１．いつまで

**いつまでですか、主よ。私をとこしえにお忘れになるのですか。いつまで御顔を隠されるのですか。いつまで私は魂に思い煩いを、心に悲しみを日々抱き続けるのですか。いつまで敵は私に対して高ぶるのですか。**（13:2-3）

この二つの節の中だけで「**いつまで**」（נֶצַח／ネツアハ）という言葉が４回も出てきます。ほとんどの詩篇は詩人の具体的な状況が書かれていないため、読者は想像するほかありません。作者がタイトルのとおりダビデだとしますと、彼が死ぬほどの病に苦しんでいたか、あるいは命を付け狙うサウル王の手を逃れてペリシテ人の地に身を寄せようとしていたか、そういう状況が浮かんでまいります。可能性が開かれているだけに、読者は自由に「自分の祈り」としてこれを唱えることができる。

私個人に置き換えて読んでみましたが、７年前に発症した皮膚炎との長い戦いが思い起こされました。また、十代の頃に負った忘れられない心の傷がしつこく自分を苦しめ続けたことも思い出しました。

詩人にとって何よりも辛かったのは、祈っても祈っても神が応えてくださらないことでした。「**私をとこしえにお忘れになるのですか**」と申し述べるほど、神が自分を完全に無視しているように感じられたのです。もはや神との関係が二度と取り戻せなくなってしまったのではないか、永遠に見捨てられたのではないか、「いのちの書」から自分の名前が消されてしまったのではないかという暗黒の恐怖が詩人の脳裏をかすめる。人は罪を犯したとき、そのようなゾッとする感覚を覚えます。罪を処理しないままでは、うしろめたくて祈ることもできなくなる。神の御顔が見えなくなるのです。詩人がそのように罪意識に苛まれていたかどうかは明確に書かれてはいませんが、旧約時代には特に罪に対する報いとして災いが下るという因果応報的思想が強く生きていましたので、自分の問題がいつまでも解決されないということは、何らかの罪に原因があるのではないかと詩人が考えたことは想像に難くありません。

３節の終わりを見ると「**敵**」の存在が身近にあったことも窺えます。詩人の苦しむ姿を見て喜び、彼の死を望む者がいたのでしょう。この「**敵**」は５節にも登場します。

**私が揺らぐのを見て、敵が、勝ったと言わず、私を苦しめる者が喜ぶことのないように。**

ここで言われている「**揺らぐ**」とは、単に振るわれるとかつまずくということではなく、地に倒れこんで二度と起き上がれなくなること、すなわち「**死**」を意味しています。詩人はまさに死と背中合わせの状況下に置かれていたのです。

本論２．わが神、主よ

**わが神、主よ、私を顧み、答えてください。私の目を光り輝かせてください。死の眠りに就くことのないように。**（13:4）

「**目**」とは、生命力のバロメーターと言われます。目は人の意志の強さ、魅力そのものを表すと言ってもよいでしょう。

知り合いの剣道有段者が言っていたことですが、試合では相手の目を見るそうです。それによって相手が考えている次の手が読めるのだと。私が彼のことを信用しているかいないかも分かると言われました。

詩人の目の輝きは失われていました。人間の目を真に輝かせるものとは、光そのものである神との交わりです。その神との交わりが実感できない詩人は、疲れ、衰え果てていました。私たちもそのような状態になることがあるでしょう。神とどう交わったらよいかが分からなくなってしまうことがあるのです。

絶望の底にあった詩人でしたが、彼の口からほとばしり出てきた言葉がありました。「**わが神、主よ**」という祈りです。「**主**」とは、神とイスラエルとの密接な関係、特に独特な契約関係を表します。詩人はこの契約関係を思い起こしたのです。そうだ、主はひとたび結んだ契約をとこしえに守り給うお方だったはずだ。私は捨てられたのではない。関係が切れてしまったのではない。もう一度神を「**わが神**」と呼んでみよう。

この「**わが神**」という呼びかけから思い起こされるのは、十字架上の主イエスの祈りです。主イエスは詩篇 22 篇の聖句を引用して祈られました。

**三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。**（マタイ 27:46）

ここには、ご自分をお救いにならない神を尚も信頼し続ける主イエスの信仰が現れています。父なる神様は多くの人の贖いを実現に至らせるために、主イエスを犠牲とすることを厭わなかった。主イエスと父なる神様の関係はこの時確かに断ち切られたのですが、主イエスは尚も「**わが神**」と呼び続けたのです。

詩人にとっても、この祈りをささげてすぐに状況が変わったということではないでしょう。しかし、彼は何も変わらない現実の中にインマヌエルの主を見出すことができたのです。ああ、この苦しみの直中にも神はおられたのだ。私には見えていなかったが、神はずっと私と一緒にいてくださった。この死と背中合わせの病にあっても、神は常に私の神であられたのだ。

私たちも同じです。困難な状況がどんなに長引いたとしても、神との契約関係が決して断たれないことを思い起こしたい。

本論３．主への賛美

**私はあなたの慈しみに頼り、私の心はあなたの救いに喜び躍ります。「主に歌おう。主が私に報いてくださった」と。**（13:6）

本篇の最後の節は一変して賛美でもって締めくくられます。これは多くの詩篇の特徴であり、理不尽な敵の攻撃を訴え続けるような詩の最後がイスラエルの祝福を願う祈りで終わっているものも数多く見られます。

ここでは、詩人の状況に大きな変化が生じたということは何も書かれていません。病が癒されたとか、敵が滅びたということは言われていない。変わったのはむしろ詩人の心です。彼が思い出したものがあった。６節に出てくる重要なキーワード：「**慈しみ**（恵み）」（חֶסֶד／ヘセド）に注目しましょう。この言葉には「一方的に契約を守る」という意味が含まれており、神が不忠実なイスラエルに対して約束を守り続ける姿が描き出されます。

出エジプト記や民数記を読んでいると、エジプトから数々の奇跡をもって救い出してくださった神を尚も疑い続けるイスラエルの民の不信仰が描かれています。危機が迫ってくると瞬く間に心を翻して神に反逆する民の愚かな姿が延々と繰り返される。しかし、神はそれでも彼らを捨てることなく、モーセのとりなしの祈りを聞き届け、幾度も赦しを与え、約束の地カナンへと導いて行かれました。このイスラエルの不忠実と神の忠実の歴史は、その後のヨシュア記、士師記、列王記、歴代誌などに引き継がれていきます。多くの者が主なる神様を捨て、偶像礼拝に陥っていく中にあって、神の側はそこにまことの信仰者を残し、信仰の系図を保ち、ついにその中から救い主イエス・キリストが誕生するのです。神の「חֶסֶד」は主イエスにおいて、ご自分の弟子たちに対する愛を通して完全に現れました。福音書には、なかなか主イエスを理解することのできない弟子たちの姿、しまいには十字架を前にして逃げ出してしまう弟子たちの姿が描かれています。しかし、主イエスは最後の晩餐の席で彼らと結ばれた契約を守り続け、裏切った彼らをもう一度弟子として召していかれるのです。

詩人が思い起こしたのは、この神の「חֶסֶד」でした。神の不動の愛に立ち返るとき、人はどのような状況下にあったとしても賛美をささげることができます。私たちはキリスト者であり、主イエスの愛に捕えられた者たちです。コロナで長らく聖餐式を守ることができずにきましたが、今日は年の初めの礼拝として、主イエスとの契約を思い起こすべく、リモート聖餐式を執り行ないます。オンラインでこの礼拝に参加されている皆様も、それぞれの場所でパンと杯にあずかっていただきたいと思います。

【結論】

これから共に歩み出す 2021 年がどういう年になるか、私たちには分かりません。価値観は更に大きく変化していくことでしょう。しかし、変わらないものが一つあります。それは神の「חֶסֶד」であり、主イエスと私たちとの契約関係です。長引く病に苦しんでおられる方の上に、深い心の傷を抱えておられる方の上に、慰めが与えられる年となりますように。契約の主を信じて共に歩んでまいりましょう。

【祈り】

慈しみ深い天の父なる神様。主の年、2021 年が明けました。昨年は誰もが苦しいところを通った一年でした。この年もまだ霧がかかったような状態ではありますが、あなたを信じ、希望をもって歩み出したいと思います。あなたにできないことは何一つありません。人間の思いや計画をはるかに超えたところで大いなる御業をなされる神です。そして、そのようなお方が私たちと契約関係を結んでくださっており、その関係はご自身の真実にかけて破られることがないとの約束を受けております。主よ、それゆえに、私たちは思い煩うことなく、これからの日々を歩んでまいります。どうかこの一年も常にこの群と共にいてください。そして、個人的にも全員があなたを深く知る年となりますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
変わることなきヘセドをもって、民との契約を守り抜き給う、父なる神の愛、
十字架の死により、弟子たちへの愛を貫徹し給うた、主イエス・キリストの恵み、
主に連なる者と常に共にまし、如何なる試練をも乗り越えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。